

## 令和2年度 伊南福祉会本部事業報告

国は、団塊の世代が後期高齢者に達する 2025 年に向け地域包括ケアシステム構築を進めています。介護保険制度は創設から 20 年を経て、急速な高齢化と介護人材不足、介護ニーズ膨張に伴う保険料負担増と課題が出てきています。

このような状況の中で、令和2年度は、本部・各施設とも新型コロナウイルス感染予防対策に追われた1年でした。

法人本部の運営に関し、理事会を3回、評議員会2回を開催しましたが、うち1回は書面決議での対応となりました。

本部として、次のことに感染予防対策として取り組みました。

- (1) 感染拡大防止による職員特別休暇制度の創設
  - ・小学校等の臨時休業に伴う子どもの監護するための休暇
  - ・感染及び濃厚接触者になった場合の休暇
- (2) 感染拡大防止対応手当支給
- (3) 感染対策に関わる補助金への対応（慰労金、緊急包括支援事業補助金等）
- (4) 職員への感染拡大防止への対応について文書による通知（随時）

観成園では稼働率が感染予防の影響により前年実績を若干下回りましたが、特定処遇改善加算により介護保険収入は 2.0%増となるも、感染症対応手当等により人件費が伸び、黒字額は大きく減少しました。

フラワーハイツでは、施設目的である在宅支援に努め、超強化型老健として年間通して運営できましたが、感染予防から利用を控える等により入所（短期含む）利用者が 7.4%減少する等により介護保険収入が 2.5%減少した。一方で人件費・事業費支出が伸び平成 27 年以降 5 年ぶりの赤字決算となりました。

順天寮では施設を最大限生かし入所需要に対応したことで事業活動収入はほぼ前年並みに、新型コロナウイルス対策等の費用が増加したものの、施設整備等積み立てを行ったうえで黒字を確保することができました。また指定共同生活援助事業所も 12 月にハレルヤを開設し 2 棟 8 名定員体制となりました。

訪問看護ステーションでは、訪問件数について前年比で介護保険は 3.5%減少、医療保険は 13.8%増加し、全体では 3.9%増加しました。これにより事業活動収入が 12.0%増加することで当期資金収支差額は 61%増加となりました。

こうした状況により、法人全体として黒字額は減少となり経営的には厳しい年でした。今後も新型コロナウイルス感染に伴う経営への影響により厳しい状況が続きますが、ご利用者、ご家族により良いサービスを提供するために、顧客満足度の向上に向けた取り組みを今後も継続してまいります。

## 令和2年度 観成園事業報告

観成園は、「安心・笑顔・その人らしさ」の介護理念のもと、ユニットケア型の特長を生かして「尊厳ある個別ケア」を進め、ご利用者の個性や生活リズムを尊重する中で穏やかな生活を送れる場所となるよう「家庭生活の延長線上にある施設づくり」に職員一丸となって努めて参りました。

利用状況は、特養定員 110 人に対して月平均の入所者数 106.2 人、稼働率 96.6%、短期入所は定員 10 人に対して月平均の実利用者数 41 人、稼働率 102.3%と、コロナ禍による影響もあり、いずれもわずかながら前年実績を下回りました。

収入面では、施設介護料は特定処遇改善加算が年間通して交付されたこともあり、前年対比で若干増加しました。一方、短期入所の居宅介護料は、感染予防の観点から年間通して空床利用を控えたことなどによる影響もあり、前年対比で若干減少しました。これらにより介護保険事業収入は、前年対比で 2.0%の伸びにとどまりました。

支出面では、人件費支出が前年対比 7.2%増となりました。人件費増の要因は、職員数の増、職員構成の変化、感染症対応手当の支給、定期昇給に加え、年間通しての介護職員夜勤手当増額などによるものです。これにより人件費率は 64.9%となり、前年対比で 3 ポイントほど上昇しました。

事業費支出及び事務費支出は、コロナ禍で事業縮小や委託業務を職員対応に切り替えたことに伴う事業費の減、感染予防対策経費及び施設・設備・器具備品費の増など感染症対策のため変動の大きかった支出科目もありましたが、全体としては前年並みとなりました。施設整備面では、電話設備の更新、タブレット面会や介護ロボット技術の導入を見据え Wi-Fi 環境を強化しました。

これらにより収支全体では、当期資金収支差額で 1 千 8 百万円余の黒字決算となりましたが、前年対比ではほぼ半減となりました。

運営面でも、コロナ禍で様々な影響を受けた一年でした。職員の感染対策を徹底するとともに、園内のクラブ活動や全体行事などを縮小・中止し、家族の面会や業者の入場を制限するなど、外部からウイルスを園内に持ち込まない対策を徹底して参りました。

こうした影響で、地域の皆様はじめ各種団体、ボランティアの皆様のご協力による様々な行事やクラブ活動、喫茶、防災訓練などが実施できず、ご利用者が生きがいや楽しみ、四季の移ろいを感じてもらえる機会や、地域の皆様に観成園への理解を深めていただく機会が持てなかったことは残念でなりません。

今後もコロナの影響は続くと考えられますが、ウイルスから利用者・職員・家族の命と健康を守りぬくという固い信念をもって、感染予防及び感染拡大防止に関係者一丸となって全力で取り組んで参ります。一方で感染状況を注視しながら地域や家庭との結びつきを深め、地域に開かれ信頼される施設を目指し、そして何より、入居者が安心して家庭生活の延長線上の暮らしができるよう、より一層質の高い介護サービスの提供に努めて参ります。

## 令和2年度フラワーハイツ事業報告

老健施設の使命でもある、在宅復帰施設、在宅療養支援を果たすために、「ご利用者の尊厳を守り、家庭復帰を支援し、地域や家族とのふれあいを大切に常に明日を見つめた活気ある施設を目指します」を理念に掲げ職員一丸となって努めてまいりました。

昨年より流行が始まった新型コロナウイルス感染症の拡大への対応に迫られた1年となりました。この現状の中、密を避けたいとの意識があり、利用を控えるご利用者もあり厳しい経営業況が続いています。新型コロナウイルス感染症対策としては、補助金を活用しての衛生資材の関連物品の購入、消毒の徹底、面会制限の実施、ご利用者、職員の健康観察を行いました。

令和2年度の利用状況は、長期入所は、7.9%の減少、短期入所は、3.6%の減少となりました。リハビリ利用者は、通所リハビリは、9.2%減少、訪問リハビリは13.5%増加。令和元年より事業を開始した障害者福祉事業、短期入所事業は、定期的な利用がありました。居宅介護支援事業の介護給付は、昨年と同数の件数となりました。

経営的には、在宅復帰率の向上が図られ、通年にわたり、超強化型老健施設として運営でき老健施設としての役割を果たすことができました。新型コロナウイルス感染症関連の支出増加、利用を控える傾向の影響を少なからず受けた結果本年度は赤字決算となりました。

施設整備については、今後必要となる介護システム、電話の更新、介護ロボットの導入行いました。

施設は、28年を経過して設備等の整備については、設備の更新や備品の什器類の更新について計画的に整備していく必要があります。

新型コロナ禍において、ボランティアの受け入れ中止、夏祭りの中止と地域との交流の機会が減ってきています。施設の理解と新しい地域とのかかわりを模索していく必要が求められています。

令和3年度介護報酬が改定され、自立支援、重度化防止の取組の推進が掲げられました。質の評価やデータ活用を行いながら、科学的に効果が裏付けられた高いサービスの提供を求められています。老健施設の機能を生かした施設運営を目指してまいります。

## 令和2年度 順天寮事業報告

生活保護受給者で居宅生活をおくることが困難な人が、安心して暮らしながら自立に向けた訓練を行う施設である順天寮では、令和2年度に、主に以下の取り組みを行いました。

- (1) 定員 60 人に対し年間平均入所者数は 65.5 人と前年度と同様に施設を最大限に生かして需要に対応し、入所措置収入は 2 億 3,780 万円を確保しました。利用者の人権尊重を第一とし、質の高いサービス提供に努めました。
- (2) 通所・訪問事業の年間平均利用者数は、前年度の 4.4 人から 6.7 人に伸び、地域移行事業の収入は前年度の 930 万円から 1,160 万円に拡大できました。
- (3) 生活困窮者への就労訓練事業と、触法者の自立支援である「自立準備ホーム」を実施し、84 万円の事業収入となりました。
- (4) 新型コロナウイルス感染症対策として、手指消毒・マスク着用、行事の工夫、入館管理等の徹底を図るとともに、隔離ゾーンを想定したトイレ・エアコン等の設置工事や、職員への慰労金給付などを実施しました。約 1,000 万円の事業費支出と、281 万円の補助金収入がありました。

以上、コロナ禍にあって、70 人弱の要支援者の暮らしを支えるとともに、3 人の方の自立に向けた道筋をつけるなど、救護施設の責務を果たすことができました。

経営的には、1,000 万円の施設整備等積立金の積み立てを行ったうえで、570 万円の当期資金収支差額を計上することができました。

引き続き、組織・施設の機能強化を図りながら、安定した経営と地域福祉の向上に努めてまいります。

## 令和2年度 指定共同生活援助事業所事業報告

グループホーム事業は、既存の「南天」に加え、令和2年12月に新棟の「ハレルヤ」を開所し、2棟8名定員体制となりました。

定員4名の11月まではほぼ満室、定員8名となってからは7名入居となっており、年間平均利用率は87%で順調に運営できています。

収入は、新棟の開所時期が予定より2か月間遅れた関係で、当初予算を下回ったものの、前年度より36%増の873万円となりました。支出は、新棟開設及び新型コロナウイルス対策等があったため、前年度より66%増の912万円余であり、資金収差額は39万円のマイナスでしたが、予算の範囲内に収まっています。

新棟開設に当たっては、集合アパートの一部借上げ・改築、設置基準に適合するための消防設備整備、備品購入などで、初期費用156万円を要しました。

新型コロナウイルス感染症対策では、物品購入などで48万円を支出し、うち46万円が補助金で補填されています。

平成29年度の開設に当たり順天寮会計から繰り入れた300万円に対しては、平成30年度から3か年間50万円ずつ繰り戻し、残額は150万円となりました。また、当期末支払資金残高は390万円余となっています。

## 令和2年度 伊南訪問看護ステーション事業報告

伊南訪問看護ステーションでは新型コロナウイルス収束の気配がいつこうに見えない中、その状況に応じた必要な対策を講じながら「生きる喜びをチーム力で支える」というミッションのもと、サービス提供に従事してきました。

訪問状況では延べ訪問件数は前年度比3.9%増となりました。介護保険については3.5%減でしたが医療保険は13.8%増という結果です。居宅介護支援利用者数は12.3%増となっています。今年度の傾向として癌末期の方が増えてきています。また昨年から看取りに関わる件数が増えていますが今年度は51件と増加しそのうち自宅での看取りは昨年同様34件でした。

経営的には介護・医療保険共に強化型を維持することが出来、当期資金差額合計1300万円を超える黒字を計上することができました。

通常の訪問業務に加えて、今年度に限り行政からの委託を受けて、病院で“医療・介護の相談窓口”業務を行いました。退院に不安を抱える家族の相談にのり、病院のソーシャルワーカーとも連携しスムーズな在宅移行となるよう活動ができ、また日常の訪問看護では学び得ない繋がりを持つことができました。もう一つの取り組みとして、児童発達支援事業所への訪問を行っておりデイサービス利用の児に、送迎やおやつのお供や吸引、胃ろうからの注入、リハビリ、オムツ交換や集団活動参加の手伝い等行っています。

ステーションでは令和4年4月に、今の事務所に併設した建物で、主に重症心身障害児・者対象の通所サービスを行うことを目指して、各基準の確認や建設・申請の準備、全職員対象で学習会を重ねたりと検討・研究をしているところです。

こうした共生型サービスを行っているところはほんの僅かです。主治医との密な連携を図り、在宅時と通所時で切れ目のない医療的サービスをおこないながら児の“育ち”を保育士等と支援したり、生活介護では身体機能維持のための訓練や入浴介助を行ないます。利用者にとって豊かに楽しく過ごせたり、家族から信頼される事業所となるように努めて参ります。